

## 『大和物語』の文章

——いわゆる前半部・後半部の差異をめぐって——

伊佐山 潤子

『大和物語』がいわゆる前半部と後半部とに分けて考えられていることは知られている通りである。内容的には「歌物語的な」前半部と「説話的な」後半部と見られ、文章の上にも相違が認められると言われる。しかし、文章に見られる具体的な違いについては到底明らかにされているとは言えないのが現状である。

たとえば、後半部の方は話が長いとはよく言われることであるが、一体前半部の方の話に比べてどれくらい長いのが明確に述べられたことはないように思う。

また、前後二部に分けるとは言うもののその境目をどこに置くかについてはいろいろな説があつて、意見の一致をみるには至っていない。この問題についてもこれまで、各章段の内容を考察するという方法はとられて来たが、文章の面での検討は立ち遅れていると言わざる

を得ない。

すなわち、文章の面から『大和物語』の前半部・後半部の問題を考へるということがほとんど手付かずの状態に残されていると言つても過言ではないのである。<sup>(1)</sup>

そこで本稿では『大和物語』の文章について調べてみて、まずもし二部に分けるとするならばどこに境を置いたらよいかを考え、次いで、前半部と後半部との差違についても述べてみようと思う。

調査には小学館の日本古典文学全集を用いた。<sup>(2)</sup> 今回の調査では地の文のみを扱っている。

### 二

まず第一の問題、前・後の境界をどこにするかについて。

これまでの研究で、後半部の初めを103段とする説、141段とする説、143段説、147段説などが出されているが、この中では今のところ141段説と147段説の二つが有力であるとされている。<sup>(3)</sup> そこでこの二箇所『大和物語』を区切って、1―140段をA、141―146段をB、147―173段をCと三つの部分に分け、文章に関するいくつかの項目について調べてみて、141段と147段と後半部の初めをどちらにしたらよいかをみて行くことにする。

#### (一) 章段の長さ、文の長さ

各章段の長さについてははやくから言及されて来たが具体的にはほ

表2

	文連接所	接詞 統型	指詞 示型
A	408	39 (9.6)	70 (17.2)
B	61	2 (3.3)	14 (20.9)
C	327	26 (8.0)	71 (21.7)

表1

	総字数	総文数	一章段の 平均字数	一章段の 平均文数	一文の 平均字数
A	23,370	548	166.9	3.9	42.6
B	2,963	67	493.8	11.2	44.2
C	16,839	354	623.7	13.1	47.7

( )内は全連接箇所に対する割合  
る。<sup>(6)</sup>

#### (二) 文連接法

文連接法の分類の仕方にもいろいろあるが、いま山口仲美氏のご論に従うと、投げ出し型・重ね型・接続詞型・指詞型の四種類に分けられる。<sup>(6)</sup>

表1でみると、章段の長さについて言えば、BはAの約3倍、CはAの約4倍長いことになる。文の数もA、B、Cでほぼそれに見合う差があり、その結果文の長さに関してほとんど差はない。章段の長さの点で、どちらかといえばBはCに近いことがうかがえる。<sup>(5)</sup>

とんど明らかにされることがなかったので、初めに各章段の長さ、合わせて各文の長さについて調べてみた。文章あるいは文の長さをはかるにはいろいろな方法が考えられるが、今回はおよその傾向をみるという意味でテキストの文字数で計算してある。<sup>(4)</sup>

#### (三) 指詞語(この、その、かの)

『大和物語』の場合重ね型はほとんど例がなく、接続詞型と指詞型についていえばおのずとその残りが投げ出し型と考えられるので、今回は文連接の方法としては接続詞型と指詞型の二種を取りあげる。表2をみると、B、Cへ行くにつれてやや接続詞型が減り指詞型が増える傾向がみられる。しかし、Bで接続詞型が少ないのはほとんど差はないと言えよう。<sup>(7)</sup>

三番目に指詞語について。語り手の姿勢が現れる表現として文章の研究にはしばしば取り上げられるものである。今回は「この」「その」「かの」の使われ方を調べた。表3。

まず、言語量がAを1とするとBは0.13、Cは0.72であるから、それらするとAに比べてB・Cで一般に指詞語の使用がかなり多いことがわかる。またうちわけでは、Aで「その・かの」が多いのに対して、B・Cでは「この」が目立って多い。

この表3からはBはCに近いことが明らかである。

#### (四) 「なむ——ける」の係り結び

次に、阪倉篤義氏以来いわゆる「歌物語」の特徴のひとつとされる「なむ——ける」の係り結びについて調べてみた。<sup>(9)</sup>

表4には出現頻度として何文に一回現れるかが計算してある。Bでいくらか多く用いられているようだが、A・Cについてはほとんど違いが見られない。

表3

	言語量	計	この	その	かの
A	1	71	34 (47.9)	25 (35.2)	12 (16.9)
B	0.13	17	16 (94.1)	0	1 (5.9)
C	0.72	87	70 (80.5)	11 (12.6)	6 (6.9)

( )内は百分比

表4

	総文数	「なむ —ける」	出現頻度 (単位は文)
A	548	93	5.9
B	67	19	3.5
C	352 <sup>(8)</sup>	62	5.7

表5

	総文末数	けり	歌	その他
A	548	346 (63.1)	120 (21.9)	82 (15.0)
B	67	48 (71.6)	1 (1.5)	18 (26.9)
C	352 <sup>(12)</sup>	233 (66.2)	16 (4.5)	103 (29.3)

( )内は総文末に対する割合

(五) 文末語

「なむ—ける」に関連して次に文末語を取り上げる。

従来文末語についてはもっぱら、「けり」と「けり以外の語」と二つに分けて考えられて来た。<sup>(10)</sup>しかし『大和物語』を読んでいると文末に歌を持つ形がかなり目につく。たとえば17段のようなもの。

一一七 松虫の声

桂のみこ、嘉種に、

露しげみ草のたもとを枕にて君まつ虫の音をのみぞなく

17段は『大和物語』の中でも最も短い章段の一つであるが、これは一文から成っており、文末に歌を放り出した体裁になっている。<sup>(11)</sup>

このような形、文末に歌を持つ例が相当目立つので、従来の「けり」と「けり以外の語」という分け方ではなく、文末語を「けり」と「和歌止め」と「その他(用言、「けり」を除く助動詞、まれに体言・助詞など)」の三種に分類してみた。

表5をみると、どちらかといえばBはCに近いことがうかがえる。

以上五つの項目について、A・B・Cの各部分と比較してみた。

初めに述べたように、一般的には『大和物語』を前・後二部に分けて考えることが多いのであるが、このほか、ここでいうBの部分(A・Cの橋渡しのもの)とみる考え方も出されている。たとえば高橋亨

氏は、ふつう140段までとそれ以降と二部に分けるけれども、「その両者も明確に区分されているのではなく、141段から147段までが媒介的な位置を占めて連続している」と述べておられる。<sup>13)</sup>

確かにこれまで項目別に見てきた中にも、Bの部分だけに特徴的と言えるものがないではない。が、表3の言語量で明らかかなようにA・Cに比べてBは分量が極端に少ないという事情がある。このことから、Bの部分を独立させて『大和物語』を三分して考えるというのには無理があるのではなからうか。

従って問題はBの部分をAとCのどちらに属させるかということになるのだが、

(一)一文あたりの平均字数

(二)文連接法

(四)「なむ——ける」の係り結び

についてはA・B・Cともそれほどの違いがあるとは言えない。しかし、

(一)章段の長さ

(三)指示語

(五)文末語

からは、BはAよりもCに近いことがうかがえる。

すなわち、もし『大和物語』を二部に分けるとして、後半部の初めを141段からと147段からとどちらにするのがよいかとなれば、後半部の初めは141段からとする方がよいのではないかと思う。

三

さて、以上で一応後半部は141段からとしたところで、第二の問題、『大和物語』の前半部と後半部との差違ということを考えてみる。ついでには先にみた五つの項目のうち、文連接法、指示語、文末語について改めて前・後二部を比べてみることにする。

(一) 文連接法

前半部に比べて後半部では接続詞型が減って指示詞型が増えていることが表6からよみとれる。たとえば141段の冒頭部分。

表 6

	文連接箇所	接続詞型	指示詞型
前半部	408	39 (9.6)	70 (17.2)
後半部	388	28 (7.2)	85 (21.9)

( ) 内は全文連接箇所に対する割合

一四一 浪路

よしい系といひける宰相のはらから、大和の據といひてありけり。これがもとの妻のもとに、筑紫より女を率て来てすゑたりけり。もとの妻も、心いとよく、今の妻もにくき心なく、いとよく語らひてゐたりけり。かくてこの男は、ここかしこの人の国がちにのみ歩きければ、ふたりの女のみなむるたりける。この筑紫の妻、しのびて

男したりける。それを人のとかくいひければ、よみたりける。  
……(以下略)

文連接箇所が五箇所あるのに対して、そのうち四箇所に「これ」「かく」「この」「それ」と指示語が使っているのに見られるように、後半部では特に指示詞型の多用が目立つ。

前記の山口仲美氏によれば、指示詞型を多く用いるのは歌物語の特徴で、前の文の内容を聞き手あるいは読み手が理解したことを確かめながら念を押して話をすすめる表現態度の現れで、これはもともと「歌物語」が「歌語り」を基盤としていたことによるとされる。<sup>14)</sup> とすれば、わずかながらもそのいわゆる「歌物語」的な文章の特徴は、後半部の方によく現れているということになる。

(二) 指示語

次に指示語について。表7から、後半部で指示語が全体的に多く用いられていること、前半部・後半部とも「このVそのVかの」の順に多いこと、後半部で「この」が圧倒的に多いこと、の三つのことがわかる。

指示語の使用の「コVソVカ」の順は、神谷かをる氏によれば、会話文にみられる特徴である。さらに「コ」は、修飾される語を語りの現時点にクローズアップさせ、そこに語り手の関心度が出て、登場人物や物、語り手聞き手の一つの同じ場に並べてしまう効果を持つていとされる。<sup>15)</sup> つまり、事柄をつきはなして客観的に述べるのではなく、

表7

	言語量	計	この	その	かの
前半部	1	71	34 (47.8)	25 (35.2)	12 (16.9)
後半部	0.8	104	86 (82.7)	11 (10.6)	7 (6.7)

( )内は百分比

話し手にも聞き手にも親しいもの、身近なものとして述べて行く態度が「コ」に現れるというわけである。

たとえば169段の冒頭部分。

一六九 井手のをとめ

むかし内舎人なりける人、おほうわの御幣使に、大和国に下りけり。井手といふわたりに、清げなる人の家より、女どもわらはべいで来て、このいく人を見る。きたなげなき女、いとをかしげなる子を抱きて、門のもとに立てり。この児の顔のいとをかしげなりければ、目をとどめて、「その子、こちら来て」といひければ、この女寄り来たり。……(以下略)

まず内舎人なる男が出て来る。この男は物語の主人公であり、彼がお使いで大和へ下る途中に井手のあたりを通りかかったとき、大変かわいらしい女の子をみかける場面。初めに井手のわたりに住む女たちがよそ者である男、通りがかりの「このいく人を見る」とある。次に視点が男の側に移動して、一人の女が抱いている子どもが大写しにさ

れる。「この児の顔」となるわけである。それからさらに子どもを抱いている女の方に視線が動いて「この女」となる。物語はこのあと、男が六・七才くらいのこの子どもと帯を取りかえて結婚の約束をする、と続けられる。男の方はすぐにこの約束を忘れてしまうが子どもは覚えていて、七・八年の後に二人はまためぐり会う……のかどうか、残念ながらこの169段は話が途中までしかなく、ここに出てきた男と女がどうなったか肝心の部分は書かれていない。しかし大変興味をひかれる物語の語り初めと言えらるだろう。というのも、物語の冒頭から「この男」「この児」「この女」と読者をして登場人物たちを身近に感じさせる、これは言いかえれば、物語世界の中に読者を引きずり込む手法が用いられているからにはかならない。読者はここを読む時に、「男・児・女」と「この」で持ち出される人物が次々とクローズアップされるのにつき合わされる。すなわちこれらの人物が自分に近いところにあることを知らされるのである。

読者に親しみを感じさせる表現態度という言い方は、先に引いた山口氏も使っておられたが、これこそがまさに「歌物語」の特徴と言われるものであって、その点指示語についても前半部よりも後半部の方にそれが著しく現れているといえる。

(三) 文末語

三番目に文末語について。

従来「けり」は歌物語の語る文体の特徴とされ、たとえば小田切文洋氏は、後半にすすむにつれて、「けり」叙述からの脱却が目立つよ

表 8

	文 末 数	け り	歌	そ の 他
前 半 部	548	346 (63.1)	120 (21.9)	82 (15.0)
後 半 部	419	281 (67.0)	17 (4.1)	121 (29.3)

( ) 内は百分比

うになり、それは作り物語化への傾向とつながっていると述べておられる。この点についてはどうであろうか。

ここでは文末を「けり」と「和歌」と「その他」の三種類に分けてある。これまで大方は「けり」と「けり以外」という二つに分ける考え方がなされてきたが、和歌止めの文が目立つことから三分類したことについては先にもいくらか述べた通りである。

構文的には和歌を文末に投げ出す形は体言止めに準じるもので、当然ながらそれは「けり以外」の項目に入れるべきものである。しかし、「歌物語」という名称に直接的に表されているように、和歌は各章段を成り立たせる大事なものであって、それをどのよう扱っているかということは充分重視されなければならぬと思う。

さて、表 8 の結果からみて、「けり」はわずかながらむしろ後半部の方で多く用いられており、前半部に比べて和歌止めの形が減った分だけ後半部で「その他」が増えていることがわかる。すなわち、前半部では和歌止め文末がかなり多いのに対して、後半部ではそれがほとんどみられず、かわりに用言や「けり」を除いた助動詞などが多く用いられているという

ことである。

これまで言われていたように、前半部に比べて後半部の方に多様な文末語が使われているのは確かであるが、だからといって後半部で「けり」の使用が減少しているわけではなく、依然として全文末の7割近くを占めておりその割合はかえって前半部よりも高いということは強調しておきたい。

ついでながら文末に関連して「なむ——ける」の係り結びについて調べてみると、前半部6.0文に一回用いられているのに対し、後半部では5.2文に一回と、これもまた後半部の方で出現頻度が高いという結果が出ている。

これをまとめると、「けり」とか「なむ——ける」とか、いわゆる「歌物語」の語る文体の特徴といわれることも後半部の方で頻繁に用いられているということになる。

以上、文連接、指示語、文末語の三項目について述べた。調査結果からは、前半部に比べて後半部の方で、文連接法として指示詞型が多用される、「この」の使用が目立つ、「けり」や「なむ——ける」が頻繁に現れる、ということが明らかにになった。

これらはいずれも従来、いわゆる「歌物語」の文章の特徴と言われて来た事柄である。そしてこれらはすべて「歌物語」が本来語られたもの、「歌語り」を基礎としたものであることから来た特徴であった。つまり、もともとが耳で聞くものであったために、文連接法では指示詞型を多用して前文とのつながりを強め、話を間違いなく把握させる、

指示語では「この」を使って話の内容が話し手にも聞き手にも身近なものであることを意識させる、さらには「なむ——ける」の係り結びによって念を押しながら、「けり」文末で説き明かしていくという方法がとられたのであった。

してみると、『大和物語』の前半部と後半部とを比べたとき、普通「歌物語的である」と言われる前半部よりも、「説話的である」と言われる後半部の方でより一層いわゆる「歌物語」の文章の特徴、すなわち口誦性とその文章に色濃くみられるということになるわけである。

#### 四

以上、『大和物語』の前半部、後半部の文章の差違ということをもめて述べてきた。

14段以降を後半部として『大和物語』を前後二部に分けたとき、ここで取り上げたごくわずかな項目に限ってみてもその文章にはいささかの違いがあるといえる。章段の長さ、文末語の多様性、指示語の使用の片寄りなどからそのことはうかがえる。しかし、その違いは前半部、後半部の性格にかかわるような本質的な差違なのであろうか。

たとえば章段の長さの問題。各章段の長さの平均が前半部1に対して後半部3.7であるのは確かだとしても、これはあくまで前、後二部の各章段の長さの平均の違いなのであって、前半部に長い章段がないわけでも、後半部に短い章段がないわけでもない。この点、このみせかけの前、後の違いにとらわれすぎないように注意する必要があるのだ

はないか。

また、文末語、指示語についても、結局は「口誦性」の現れ方の相対的な差にすぎないことは先に述べてきた通りである。

『大和物語』を前、後二部に分けることの意味は、いま一度改めて考えてみなくてはならない問題であると思う。そのためには前、後の差違というものを具体的に明らかにする作業をすすめて行くことが求められるだろう。少なくとも文章について言うならば「口誦性」は、前半部、後半部に一貫しており、むしろ後半部の方にその特徴が著しいわけで、これまで一般に「歌物語的前半部、説話的後半部」と言われてきたことは一致しない。「歌物語」が「歌語り」を基盤としたものであるのなら、その「語り」の特徴をよく現しているのは後半部の方であり、後半部の方こそが「歌物語的」であることになってしまふからである。この点をどう考えたらよいのか。

ともあれ、従来の『大和物語』研究ではいわゆる前半部、後半部の違いの面が強調されすぎたきらいがあったのではないかと思う。『大和物語』全体をとらえる考え方にもっと我々は目を向けてもよいのではないか。文章に一貫してみられる「口誦性」は、そのことを示唆していると思われるのである。

残された問題は数多いがすべて今後の課題としたい。

(一九八六、一一、一二稿)

## 注

- (1) 管見に入ったものでは、松尾拾「大和物語文体試論」『語文』24、昭41・6)などごくわずかである。
- (2) 文の認定の仕方が私見に近いことから取り上げたもの。柳田忠則「大和物語小考—前半と後半の分け方—」『解釈』378、昭61・9)
- (3) この点に関して、塚原鉄雄先生から音節数によるという考えをご教示いただいた。今後の研究課題としたい。
- (4) 表の数値の処理については問題もあるが、およその傾向をみるについてはこの程度の比較でもよいのではないかと思う。以下の表についても同様にご覧いただけると有り難い。なお統計的処理の方法については今後さらに考えてみようと思っている。
- (5) 山口仲美「平安文章史研究の一視点—文連接法をめぐって—」『国語学』98、昭49・9)ここでは「平安文学の文体の研究」(明治書院、昭59・2)による。
- (6) 重ね型についてはその認定の仕方に全く問題がないわけではないことを付言しておく。
- (7) 総文数が表1の354に対して352になっている。これは169・171両段がいわゆる切断形式で、文の途中で切れてしまっているところから、文末にかかわるときにはこの分を除いたことによる。
- (8) 阪倉篤義「歌物語の文章—「なむ」の係り結びをめぐって—」『国語国文』22の6、昭28・6)ここでは『論集日本語研究12中古語』(有精堂、昭55・6)による。そのほか。
- (9) 小林岩彦「伊勢物語・大和物語の文体」〔『中京大学文学部紀要』4の1、昭44・6)ほか。



- (11) 「嘉種に」のところを句点にするか読点にするかは問題で、それによって文末語も当然かわってくるが、今回はすべてテキストに従った。
- (12) 注(8)に同じ。
- (13) 高橋亨「大和物語」(『研究資料日本古典文学①物語文学』明治書院、昭58・9)
- (14) 注(6)に同じ。
- (15) 神谷かをる「物語文章史と指示語」(『語文』39、昭56・12)
- (16) 小田切文洋「大和物語の表現方法―第一部と第二部を対比して―」(『日本大学文理学部研究年報』32、昭59・2)

〔付記〕

本稿は昭和61年度国語学会秋季大会での発表をもとにまとめたものです。発表の席上そのほかでいろいろとご教示くださいました諸先生に、この場を借りて改めてお礼を申し上げます。

(補注) 成稿後、指示語「この」に関して南崎晋「大和物語の文章―「この」の表現性を中心として―」(『城南国文』6、昭60・12)のあることを知った。ご報告しておく。